

塚原 史 著

『人間はなぜ非人間的になれるのか』（ちくま新書、2000年）

横山 玲子

我々が、我々自身を「人間」というカテゴリーにおいて認識するようになったのは、いつのことであろうか。15世紀末に始まった大航海時代、ヨーロッパ大陸から飛び出して海を渡った人々は、後にアメリカと名づけられた大陸で、形状的には極めて自分たちと類似した人々に遭遇した。しかし、言葉も風習も全く異なったその人々を、すぐには自分たちと同じ「人間」であるとは理解しなかった。またその逆に、アメリカ大陸の先住民にとっても、突然海の彼方から現れたヨーロッパの人々が、自分たちと同じ「人間」であるとは理解できなかったであろう。当時のスペイン側の記録によれば、カトリック教会において、アメリカ先住民たちが「人間」であるかどうかということが真剣に議論されたのである。

「人間」ということばは、何を示しているのか。我々が用いている「ことば」は、我々が知覚、認識するすべてのモノ・コトに対してつけた「名前」であり、同時にそれは、「そうであるモノ・コト」と「そうではないモノ・コト」とを区別することに他ならない。「人間」ということばが作られたとき、同時に「人間ではないもの」というカテゴリーも作られたのである。このレベルにおいては、紀元前のはるか昔から、どの地域に住む集団も各々独自の方法で、自分たちを「人間ではないもの」と区別していた。しかし、大航海時代を通して起こった現象は、これらの差異性を超えた、普遍的な意味における「人間」ということばの共有である。換言すれば、「人間」とはこうである、という定義づけがなされたとも言えよう。しかしその根底にあったのは、近代ヨーロッパの価値観や世界観であり、理性的な存在としての人間であった。それにそぐわない振る舞いをするものは、いわば劣った人間というレッテルを貼られたのである。

20世紀は、地球規模で起こったふたつの世界大戦を経験し、また、原爆というそれまでの戦争のあり方とは全く異なった武器が発明され、「人間」とは何であるのかが再び問われた時代であった。さらに二大大戦終結後、各地で民族紛争が激化するとともに、国家としてあるいは民族としての独立が相次いだ時代でもあった。ここにおいて、「我々とは！」という視点から、あらたに「普遍的ではない人間としての存在」が主張されたようにも思える。それは、近代ヨーロッパ流の価値観にではなく、それぞれの価値観に基づいた人間としてのあり方を認めさせようとする運動でもあるだろう。

塚原氏は、「地球上に散らばった多様な差異の無秩序な集合である人びとを「人間」という言葉でひとまとめにしようという発想が、世界中で共有されるようになったのは、それほど昔のことではない。18—19世紀のヨーロッパで、啓蒙思想と科学技術の急激な発達きっかけとなって産業革命と市民革命が起こった。これらの出来事をつうじて出現した「近代」

という社会の仕組みが、はじめてもろもろの差異の彼方に「人間」という普遍的なアイデアを構築したのだった」という。そして、「近代の子である普遍的「人間」が、近代そのものの思想的展開によって「非人間的」な方向にむかいはじめるのである。20世紀に入る頃から、普遍性を体現する場としての「人間」をめぐる価値観の重心が、理性から無意味や無意識、個から全体や集団、「文明」から「未開」、そしてオリジナルから複製や記号へと、大きくシフトしていく。このシフトの延長上に、アウシュヴィッツから高度消費社会にいたる「非人間的」な現実が出現したとすれば、いったいなぜ「人間」が「非人間的」になれたのだろうか」と問いかけるのである。

塚原氏は、この「非人間化」の歴史を、ヨーロッパにおける芸術史を軸としながら語っている。例えば、1900年頃に各々パリを訪れたリルケとセリーヌは、夜でも電車や自動車の騒音が絶えない、群衆の雑踏に満ち満ちたパリの異様さについて共通の印象を記している。塚原氏はこれらの記述に対して、「機械は、人間を威嚇する新たな獣性の表現そのものとして、また、群衆も知的生物にふさわしい人格と個性を失った塊となって個を圧迫するものとなった」と述べている。進歩や発展を約束した文明化は、結果的に、理性的で主体的な、自由で平等な人間像などというものが虚構であることを示すようになる。「結局、戦争ってやつは俺たちには、まったく理解できないしろものだった。…すごい量の弾と太陽の光のなかで、俺はこれほど自分が無用を感じたことはなかった。こいつは、とてつもなくでかい冗談なんだ」というセリーヌの作品に書かれた一文は、戦場のみではなく社会のあらゆる場面に見られるようになり、新たな「非人間的なもの」すなわち「無意味」を生み出すことになったのである。それは、1918年のツァラによるダダ宣言「ダダは何も意味しない」ということに象徴される。塚原氏は、「ツァラのダダは人間のモノ＝オブジェ化をすでに予感させるものだった」と述べている。こうした芸術諸派の思想や活動は、やがてドイツ、イタリアのファシズムとも関連し、人々の視点は、個から全体へと推移していくのである。

また、人間の知的関心はもはや文明という中心ではなく、それを取り巻く周辺へと向けられて、未開社会がもっぱら関心的となった。文化人類学の誕生やピカソに代表されるキュビズムがその例である。このことは、文明＝中心＝理性と未開＝周辺＝非理性という二項対立によって説明される。さらに、文明を生きる人間たちの精神構造のなかにも、未開につながる暗闇の領域が潜在していることも明らかにされた。無意識と狂気である。自分の意志とは全く無関係に体の一部が動き出す、あるいは意識を失っている間に、自分の知らない行動を取っているとといった「自動症」。また、「爆撃の最中に塹壕の盛土の上に立って、飛び交う弾丸の方向を指さした」若い男性が、「目の前の戦争は模擬戦にすぎず、砲弾はまがいものですこしも危害を加えることがなく、身体の傷はメーキャップによるものであり…」と主張した例が挙げられている。ここに至って「私」という存在そのものが、換言すれば、「私」と括ることのできるものが、極めて曖昧であることが明らかにされたのである。こうした、個人の内面を探ることで人間の非理性的なものを理解しようとする研究が行なわれる一方で、社会では大衆化と機械化が進み、それは「オリジナル」のもつ意味や価値を奪い去り、複製と記号の世界へと進むことになった。

「ヒトという生きものが「人間的」であるのは、ひとりひとりが、自分以外の誰によっても

取り替えられないオリジナルな存在であるからにはほかならない。自己という意識と個性と意思が生じる場所である「私」は、「私」以外の誰のコピーでもないからこそ、市民社会の一員としてもろもろの権利と義務の主体であり得た…今世紀の社会と文化を特徴づける「非人間的なもの」へのシフトは、オリジナルな「私」をかぎりなく不安定な場面に連れ出すことになる。大衆社会の出現と機械文明の発展は、「私」という主体から意思と個性をはぎとり、他の無数の個人と選ぶところのない客体に変えてしまうのだ」と塚原氏は述べている。そして高度消費社会に到達した我々は、ついには「現実の消滅」の段階を迎えようとしているのかもしれないのである。「現実の消滅」とは、この場合、世界と人間が、「いま、ここ」にしかないという一回性を失って、「いつでも、どこでも」反復可能な記号と化してしまった状況のことだ。…かつて、「現実」は欠如におおわれていたから、人びとは貧しく、世界は血と汗と涙にまみれていた。ところが現在、つまり戦争と革命と反革命の時代が終わりを告げた後で、高度消費社会の住人は果てしないゆたかさを謳歌している。彼らにとって、チャイルド・シートから葬儀のスタイルまで、人生のあらゆる場面は商品カタログから選択する行為でしかなくなってしまった。

塚原氏の言う「非人間的」なものとは、同類である人間を殺害する行為に始まって、人生のあらゆる場面をカタログから選択する行為へと至る。アウシュビッツでの大量殺戮とその背景にあったファシズム、ヨーロッパの芸術と思想の変遷、ヒステリーや自動症などの心理学、映画の世界、そして未開と文明など、塚原氏はさまざまな分野にわたる資料の間を自由に飛び歩きながら、人間社会を見つめている。とくに、「無意味」と「現実の消滅」は、まさに現代社会の根底に横たわる問題であろう。

冒頭で、民族紛争はあらたに「普遍的ではない人間としての存在」を主張するものではないかと述べた。ここで言う「普遍的ではない人間としての存在」とは、塚原氏の言う「普遍的人間」を念頭においたものである。すなわち、本来もっていた差異を「認められずに」いる人間の存在である。人間とは普遍的なものであるという前提が作られたために、固有の存在のあり方を「無意味」なものにされた人間の存在である。昨年9月に起こった同時多発テロ事件も、この延長線上にあるとは考えられないだろうか。この事件以来文明の多様性が説かれ、共存・共生の道を探るべくさまざまな分野の人々が文明そのものについて考えるようになったが、多くの場合、グローバル化や欧米主導型経済に対する批判に終始しがちである。批判も必要だが、現代文明形成に大きな影響を与えたヨーロッパの価値観や世界観の変遷にも目を向け、モノ・コトの本質を見なければ、何の解決ももたらされないであろう。

また、「現実の消滅」は、人間から真偽を判断する能力を奪い去ることになる。いや、消滅してしまうのであれば、真偽を判断する必要もないのであろうか。だとすれば、人間の存在とは何かをもう一度問わなければならなくなる。「本物」を知らずに育った人間には、そのモノ・コトの真偽は分からない。本書のなかで、機械化と記号化が進むことで、極めてオリジナルに近い複製が可能になり、もはやオリジナルの意味は失われてしまったという記述がある。新たに何かを創造することの意味すらも、失われてしまうのである。本書は、人類が進むべき方向を考える新たなきっかけを提供してくれるであろう。